

春風秋霜 9月号

平成29年9月1日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 モンゴルを訪問して

7月31日から8月4日まで、モンゴル国を訪問してきました。市長以下8人でスポーツ省やオリンピック委員会、ボクシング協会・ナラン外国語学校を表敬訪問してきました。

初めてのモンゴル訪問のため、日本との違いが目にとまったので、いくつかを紹介します。

- ・ 夏休みは2ヶ月以上あり、多くの家庭は郊外に出て行く自然体験を大切にしている。大人も仕事のONとOFFを区別し、休暇を楽しんでいる。
- ・ 遊牧民の食文化が色濃く残り、肉食や乳製品の摂取が大変多い。伝統的な食べ物も多く、発酵乳のお菓子は来客時のおもてなしに使われている。
- ・ ウランバートルには、全人口の約半数が住んでいる。市内には火力発電所が数箇所あり、冬場は暖房用燃料から出る排気ガスも重なり、霞んでしまうほどの大気汚染が起きる。インフラ整備は十分とはいえず、雨の日には停電も発生する。
- ・ 遊牧民出身者のスポーツ選手が活躍している。遊牧民の生活が、体幹や強い精神力を養うことに繋がっている。
- ・ 郊外には広大な草原が広がり、牧畜が盛んに行われている。牛や羊だけでなく、馬も多く、ヤクの放牧も見られた。森林は少なく、枯れた木の目立つ山も多い。
- ・ 国民の平均寿命は、69歳と短く、100歳以上の国民は4人だけと少ない。来日したモンゴルの子供たちが、日本にはお年寄りが多く、その老人が自転車に乗っていることに驚く理由がわかる。
- ・ ウランバートルは大都会なのに、手つかずの遊休地と思われるスペースがたくさんある。これから発展していく余地が残っている。



2 早すぎる若者の死

私が、島二中時代に在籍していた若者(22歳)が、交通事故で亡くなりました。スピードを出した車での追越しが原因の単独事故とのこと。詳しい状況は分かりませんが、若者がスピードを出すことや追越しをすることは決して珍しいことではありません。本人は、このような結果を予測して運転をした訳ではないと思います。たまたま、何かの要因が重なり最悪の結果になったのでしょう。

通夜の席で同級生は、「この事故の前に小さな事故を経験していれば、もっと慎重な運転をしていたのに。」と言っていました。多感な若者にはどんな話をしても伝わらないかもしれませんが、大人は、運転の危険性を伝え続けなければならないと思います。

この若者の死を目の当たりにした若者たちは、自動車やバイクの事故の怖さを知ったと思います。この若者の死が他の若者の慎重な運転に結びつけばと願うばかりです。

3 夏休みの学習支援について

三ツ合町子供会や第三地区社協が、夏休みに子供たちの学習支援を始めました。また、中溝町自治会が行っている駄菓子屋事業「なかみぞさんち」も宿題や自由課題のサポートを夏休みに行っています。

三ツ合町では、38人の子供が参加し、教員OBを中心とした皆さんが、三ツ合町公会堂において3日間の学習支援を行いました。第三地区社協が行っている「夏休みさんちく子供ルーム」は、横井公会堂において8月の火曜日に4回開催され、中・高・大学生のボランティアが活躍してくれました。

この話は、8月17日（木）に行われた自治推進委員会において、市長から市内の自治会長にも紹介されました。島田市では、湯日地区においても以前から学習支援を含む子供の居場所づくりが行われ、六合地区の「チャレンジ教室」も息の長い活動です。このように、地域の子育て支援が年々充実・拡大してきていることは、大変ありがたいことです。

地区の皆様にご感謝すると共に、このような活動に自主的に参加した子供たちの意欲も評価すべきです。関係する学校において、該当する子供たちへの価値付けをお願いします。その価値付けが、今後の広がりにつながると思います。

4 AI時代における必要な能力について

内外教育(7月28日号)に藤枝市出身の東京大学大学院池谷裕二教授(脳科学)の話が紹介されていました。AIの発達により、2030年までに240万人の雇用が失われると予想されているが、どんなにAIが発達しても、AIにできず人にしかできないことは、謝罪と接待だということです。

ロボットがどんなに謝罪しても誠意は伝わらないし、相手の気持ちを読みながら言葉を選んで謝罪する人に、ロボットは勝てません。また、AIはプロの棋士に勝てても、相手を気持ちよく勝たせる勝負は無理だといえます。この文章を読み、人間に求められる究極の能力は、相手の気持ちを大切にコミュニケーション力かもしれません。皆さんは、どのように思いますか。

肘かけ椅子

北島 正 教育長職務代理者

二男の妻の出産に際して、援助のため泉大津市(大阪府)で約1ヶ月間過ごした。7月初旬の日曜日、5歳と2歳半の2人の男児(孫)と散歩に出た。頻繁に車や自転車が行き交う道路の歩道を歩いていると、駐車場のフェンスにツバメが1羽とまっているのに気づいた。近寄ってみると、それは白いうぶ毛も少し残っている子ツバメで、3メートル位まで近づいても逃げようとはしない。と、そこへ別のツバメが飛んできてフェンスにとまり、またすぐ飛び立って直径20メートルくらいの円を描いてはそばにとまる。これを何度か繰り返す内に、小ツバメも羽ばたいてフラつきながら数メートル先に移動する。どうやら、親ツバメが子ツバメに飛び方を教えている最中らしい。クマゼミの音がやかましい暑い商店街の一隅で、2人の孫と共に30分以上も立ちすくんで、その様子をじっと見ていた。

その日の夕食後、たまたま持っていたルース・エインズワース作の「小すずめのぼうけん」という絵本を読み聞かせた。ふと思った。あの子ツバメは絵本の小すずめのように巣に戻れたのだろうか。それとも、明るい内に飛びたって親離れしたのであろうか。それとも……

翌朝、同じ道を通って豆腐屋に行った時には、フェンスの周辺には親子のツバメは居なかった。